慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会学者たちの声: アンケートより
Sub Title	
Author	
Publisher	三田社会学会
Publication year	1996
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.1 (1996.) ,p.30- 35
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: 社会学はいま、何をなすべきか
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19960000-0030

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社会学者たちの声:アンケートより

さまざまな場所で社会学者たちの声を拾ってみました。質問内容は「社会学はいま、何をなすべきでしょうか。あなたのご意見をご自由にお書き下さい」というものです。以下その回答をＡＢＣ順に列挙します。カッコ内は回答者の、回答時の所属です。

平林豊樹（慶應義塾大学大学院生）

とりあえず、私は修論ではブルデューをやっておりますので、ブルデューの方法論を実行することが、社会学（者）が為すべきことだと思います。

池周一郎（帝京大学文学部）

何もするな。下手な考え休むに似たり。古来「何をなすべきか？」という問いかけに対してまともなことが行われたためしなし。

岩井淳（東京工業大学大学院生）

「社会変化の方向を決めていく」

近年は、社会変化が速すぎて理論化が追いつかない。「現代社会」を理論化できないという現実に対し、社会学者の採り得る道は次の３つである。

1)以前の社会を観察する立場に立ち、注目点に関する理論づくりを行う。

（現代社会に注目し、それが「現代」でなくなった頃に発表するという立場を含む。）

2)近未来社会の設計者の側に立ち、自ら社会変化の方向を決めていく。

（社会変化の減速化に意味を見出し、何らかの方法で減速化を実現し「現代社会」の理論化を成功させようとする特殊な立場はこれに含めるものとする。）

3)いわゆる「社会変化」に影響を受けない普遍的な社会理論を組む。

このうち2の選択肢はあまり意識されていないが、重要である。例えば、計算機通信網上に新たな社会秩序を構築するような研究は、社会的に有用であるし、社会学者が蓄積した知識を生かせる研究領域である。

岩間暁子（北海道大学大学院生）

研究者それぞれの研究成果を、社会学全体の知の成果として蓄積していく努力が求められていると思う。例えば、実証研究では同じような内容の調査が繰り返し行われており、その時々の実態把握にとどまってしまっている研究が少なくない。

少なくとも、先行研究をふまえ、どこが新たな知見であるのかを批判的に検討していく必要があると思う。また、社会学の中では時代を反映したブームがあるが（最近では文化

的再生産論、ジェンダー、エスニシティ、環境、情報化など）、それらを単なるブームにおわらせずに、これらの新たな視点を導入することで具体的に何を明らかにしたのか、を、これまでの社会学の知見と比較、検討していく必要があると思う。

神山英紀（東京大学大学院生）

社会学固有の対象（全体社会レベルであり、現在の時点にあると思うが）についての、素人が素朴に疑問におもえることを（自明なものをあえて疑うというのではなく）、一貫した社会学独自の理論をもって、常識以上に解明する、こたえる、ということができなくてはいけない、とおもいます。制度の内に社会学がある限りは。

～というようなことをやる人もいくらかいてほしいということ。

片桐雅隆（中京大学社会学部）

「社会学は何をすべきか」という問いに対して明確な解答はありません。それは第1に、社会学のアイデンティティがあいまいであること、そして第2に、社会の方向性や解決すべき問題が不明確であることに由来すると思われます。学問が1つの娯楽と化し、社会的な機能が求められずまた求めようとしない事態が、社会学が問うべき現象かもしれません。

金森剛（㈱野村総合研究所）

社会学は「科学」であると同時に、社会的「価値」を顕在化させるという作業を通じて、社会的価値を創造しているのだと思います。

単なる哲学や単なる統計学でない、価値創造の学として、社会的に期待されているのではないでしょうか。

木村邦博（東北大学：数理・計量社会学）

社会学はいま、次のような一連の仕事に取り組むべきだと思います。

(1) 「ふしぎ」に思える社会現象や「社会問題」の発見

(2) その社会現象や社会問題を引き起こすプロセスやメカニズムの考察

(3) その考察にもとづいて、社会問題の解決策を模索すること

もちろん、社会学はこれまでもこのような仕事に取り組んできました。しかし、必ずしも大きな成果をあげてきたとはいえないように思います（特に上記(2)や(3)に関しては）。

社会現象を引き起こすプロセス・メカニズムを明らかにするにあたっては、モデルを作り、そのモデルが仮に正しいとするとデータにどのような構造が見られるかを予想し、その予想と実際のデータとをつきあわせてモデルを評価する、という考え方をもっと徹底させる必要があると思います。

また同時に、社会学はもっと現実の実践的な課題に積極的に関わる必要があると思いま

す。（現実の問題に関わっているようでも、「社会評論」的な姿勢が強すぎます。）実践的な問題に対して発言をする場合でも、モデルを作って考えるという思考法は強力な武器になると考えています。

ただし、以上に述べたことは、「社会学」全体（あるいは「社会学者」の集合全体）が取り組むべきことだと考えています。ひとりひとりがすべてを同時にやらねばならない、とは考えていません。目標を共有した上での分業は望ましいことであると思います。

草柳千早（大妻女子大学）

「社会学はいま何をなすべきか」という問いに対して答えることはできません。ひとつ、「社会学」はあまりに多岐で、私には一括できません。ひとつ、「べき」はどこからやってくるのでしょうか。社会学の中の様々な「べき」を相対化しようとするまなざしが、社会学のチャームのひとつであると思っています。

この問いをより個人的に受け取るなら、Social Problemsにアプローチする社会学的方法を（それがいかにして可能なのかも含めて）問うことは目下の課題です。それがどういうことかは、個人的な作業の解説になるので書きません。

上記の問いは、社会学に関わる人間に「お前は何をするものか？」と問うレトリックとして捉えたいです。何をするにも、なすべきにしても、具体的で実行可能なプログラムがなければ意味がなく、それは結局自分が具体的に何をするのかということなのだと思うので。当たり前のことですが。

宮野勝（中央大学：理論社会学、計量社会学、数理社会学）

１。理論が蓄積されていく方途を確立すること。

２。実証の方法論を社会学者にまた広く世間に普及させること。

３。１・２を踏まえた上で、社会の未来についての予測や変革の提言に関わること。

中筋直哉（山梨大学）

必ずしもなされていないとは言えませんが、多様な研究を多様なままに味わうような寛容さを、良き伝統として内外に説得的に示すような活動をひとりひとりの社会学者が心がけることが大切だと思います。

大石裕（慶應義塾大学法学部）

政治社会学の観点から

1.権力作用としてのコミュニケーション

2.国家（歴史）社会学、とりわけ近代日本社会の分析を行い、現代日本社会を逆射すべき。

佐野栄一（慶應義塾大学教職課程科目等履修生）

社会学の領域（もし領域というものがあるならば･･･。学問はそれぞれ密接に関連していると考える）の中の或る分野について、各々の研究を言語化し、理論化し、体系化していくことによって他者へ明示していくことで、妥当性をはかったり、科学性を得ようとしたりして、一般性を形成していこうとするのが研究者の仕事であると思う。研究を深め、認識を深め、考えを深めていくことによって更に研究を精緻なものにしていこうとするのが研究者の姿勢として大切なことであろう。しかしやはり象牙の塔であってもならないと思う。マルクスの様に、科学的歴史観を根拠に労働者に団結を説き、階級闘争の歴史を終えんさせようと社会運動を、研究者自身が率先して展開していくことも必要なのではないだろうか。或る程度知識を持ち、批判（反対するという意味ではない）的判断力を持ち得る研究者が民衆運動を先導していくということも社会学では不可欠の要素であると思う。

佐藤嘉倫（東北大学）

オウム真理教などのアクチュアルな社会問題をリジッドな理論で分析すること。

志田基与師（横浜国立大学）

「多元社会における共生の可能性」について、基礎的ならびに実践的な研究をすることです。

社会学の出発点が、知的な問題の探求と同時に規範的な目標をもち、実践的な処方箋を社会に示そうとするものであったことを忘れてはならないと思います。社会学という学問分野が制度化され、社会的に認知されるにしたがって、社会学の営みは官僚主義化してきました。社会学者は社会学者どうしで話をしていれば済むようになり、それぞれの縄張りが成立し、同じ土俵の同業者に評価されることが社会学として優れているかどうかの唯一の基準となってきています。しかし、学問の有効性はつまるところ、直接間接にそれが社会にいかに役に立っているか、で判断されるべきです。少なくとも、社会学者は自分たちの行っていることの正当性・合理性を社会に対して説明する責任もあります。

社会に対してどうすれば貢献できるかは、その時代や社会・文化によっても異なるでしょうが、２１世紀の社会が、あらゆる側面で相互依存性を深めると同時に、これまで人類が経験したことのない異質性を抱え込むという状況にどう答えるのかが、社会学者に課せられた責務だと思います。

鈴木智之（帝京大学）

「いま何をなすべきか」と問われても、改めて答えるべき言葉がありません。私にとっての社会学は、私的（個人的）なものとして経験される感情や感覚から出発して、その集合的、社会的な条件を問いながら、かつ他者に（公的に）伝達する手段でしかありません。

ですからいつであろうと、その作業を継続していくだけのことです。

竹内治彦（岐阜経済大学）
・ディシプリンの再確認
・現代の社会はこうなっている、と経済学者や法律学者も納得するような形で、社会学的に規定してみせること。
・社会学の学ではなく、社会の学をやらなくては。（これは別に調査をしなくてはと言っているのではありません）

樽本英樹（北海道大学）
他の分野の人々から「社会学は何ができるのですか」とよく尋ねられ、うまく答えられずとまどうことがよくあります。この理由のひとつに、各論文がどの程度既存研究をふまえていて、どの程度の水準を達成しているかがわかりにくいことがあります。自戒の念もこめていますが。ぜひ、達成水準が明確になるような場を提供していただけるとありがたいと思っています。

海野道郎（東北大学：数理社会学、環境社会学）
①社会学の知見を、経験的な確からしさ別に分別すること。
ex. 命題Ａ「　～　」：〇〇さんが言っているが経験的裏づけなし
命題Ｂ「・・・・・」：（　，　）（　，　）（　，　）・・・など多数の調査実験によって追認されている。正しい蓋然性が極めて高い
②①をふまえて、解明すべき課題。ただし、『理論と方法』17号のものよりは、具体的かつシャープであるのが望ましい。
しかし小生は（小生自身が現在属している東北大学関係のものも含めて）スクールジャーナル的なもの自体の刊行に否定的である。

山岸美穂（慶應義塾大学文学部、神田外語大学外国語学部非常勤講師）
社会学の課題は、人間、社会、日常生活を理解することである。私たちは、今、日々をどのように生きているのか。現代はいかなる時代なのか。社会学の視野は、日常的世界の微細な場面に行き届かなければならないのである。
こうした課題を有する社会学において、今、強調されるべき事は、社会学的想像力、そして、社会学的創造力を、豊かに、逞しくしていく事だと私は考える。人間、個々人の生き方から社会を理解し、マクロな社会という視点から、個々人の生活を理解していく事。時代の様相を多様な角度で理解していくとともに、個々人の人生が社会学において、クローズ・アップされるべきだと思うのである。

また、理論、実証、実践を巧みに融合していくことも重要である。

今日、社会学的視野、知識が必要とされているのは、社会学の研究者集団においてのみではない。社会学は、社会の中で、孤立してはならない。

他の諸科学と連携し、現実の問題に立ち向かうことが重要であり、社会学は日常生活の中に、そして、生活する人々全体の中に、位置づけられてこそ、初めてその意義を有することを、私たちは、改めて認識しなければならないのである。

山岸健（慶應義塾大学文学部）

人生を旅する人びとにさまざまなに示唆を提供することができるように、社会学にたずさわる人びとが努力していくことが必要と思われます。

山崎敬一（埼玉大学）

なぜ、どのように、社会学をなすことができるか、考えるべきである。

「個人主義的合理主義的モデル」に頼ることができないときに、「社会学者」は、モデル構築者という資格だけで、「科学者」として分析できるわけではない。また現代の社会では、「社会学者」という資格のみで分析できるわけではない。

どのような根拠で「社会学者」は語ることができるか、この問いは理論においてだけではなく、より実証的と言われる分野でさらに問われるべきである。

匿名希望

（教育の課程で）

・読むべき古典のリストを、3ランク位で作ってみる。
　例：トップが5冊、その次が20冊、その次が50冊ほど。修士課程の人が最低限呼んでおくべきもの。

・古典のフォーマライズ。すべての社会学者が共通に利用できる「知的財産」として、古典を整理しフォーマライズする。

（外在的な環境）

・研究情報の公開。ホームページなどで、研究会・調査・学会・論文など、社会学の研究に関する情報を、多くの人にアクセス可能にする。

ご協力ありがとうございました。